

海外旅行では誰も訪れない外国

～バングラの話～

八戸市立白鷗小学校 木 津 正 博

I. はじめに

「アッラー フー アクバル、アッラー フー アクバル…」

夜明けと共に、近くのもスクから、「朝の礼拝をしましょう」と呼び掛ける有線放送がガンガン鳴り響く。よく眠れない夜を過ごしていた私は、恐怖に怯えながらダッカ生活の幕開けとなる不快な朝を迎えた。

いかに、海外旅行ブームとはいえ、バングラデシュを訪れる日本人は少ないと思う。実際、コレラ、アメーバー性赤痢、マラリアなどの病気、洪水、サイクロンなどによる災害、人口稠密、極度の貧困など、この国から連想されるイメージは悪いものばかりである。私は、その国に1988年4月から1991年3月までの3年間住み、ダッカ日本人学校に勤務していた。そこで、私が見、聞き、触れたバングラデシュについて、紹介したい。

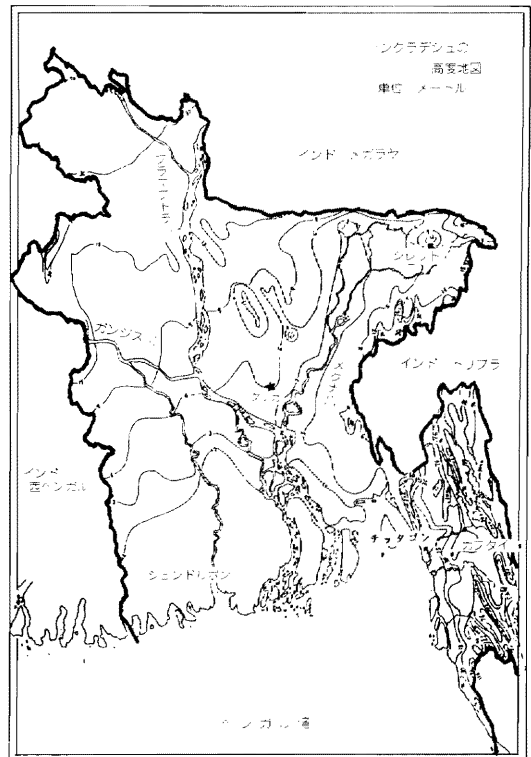
II. 地理・気候について

1) 地理 (地図1 参照)

バングラデシュは、インド亜大陸の北東部にあり、国土はその源流をヒマラヤに発するガンジス川と、チベットに発するブラマプトラ川が合流し、大河となってベンガル湾に注ぐ世界最大のデルタ地帯にある。面積は、日本の約0.4倍であり、このうち河川部分が国土に占める割合は約10%に達する。南東部のチャッタゴン丘陵、および北東部のシレット丘陵地帯をのぞくと、ほとんどが海拔9メートル以下の平地で、モンスーン季には、国土の大半が水面下に沈んでしまうと言われている。

2) 気候

季節的に大別すると、乾季と雨季に分かれる。11月から2月までは温暖な乾季で、晴天の日が続き、青物野菜が市場に出回る。3月から5月



地図1 バングラデシュの高度地図

にかけて気温が上昇し、時折、激しいスコールと共に、ゴルフボール位の大きさのひょうが降ることもある。そのひょうによって、ボンネットや屋根が凹凸になってしまった自動車を見た。5月は一年中で最も暑い時期である。その最高気温35度、湿度90%を越えるようなダッカのジア国際空港へ、雪が溶けて間もない青森からネクタイを締めて降りたった私の姿は想像するにたやすいと思われる。6月から10月までがモンスーン季で、気温はやや下がるが最も多湿な時期である。ベンガル湾から来襲するサイクロンがこの国の気候の大きな特徴である。1991年には、4月30日にサイクロンに襲われ、約14万人の犠牲者を出した。私が、帰国して、一ヶ月後の出来事である。

3) 洪水

私が赴任した1988年の洪水で、ダッカ日本人学校も床上50～60センチ位まで浸水した。水が引くまではかなりの時間がかかるであろうということで、9月5日から14日まで、被害のなかった教員の自宅で分散授業を行った。私は5年生を担当していたが、在籍していた3名の児童と自宅にて授業をするという貴重な体験をした。

バングラでは洪水との関係で、土地によって、植える稲の種類を変えている。洪水で水かさが増すところには、水が深くても育つアモンやラヤザと呼ばれる稲を植え、水かさが増さなければ少し高いところには、アウスという稲を植えるといった工夫をしているようだ。

また、洪水によって、世界各国から義捐金や救援物資などを受けることになり、外貨を稼ぐことにもつながっている。実際、1988年には、救援物資としてアメリカから送られたカリフォルニア米が、バングラの貧しい被害者達の口に入るのではなく、普通のマーケットに売りに出されていた。私達日本人が、その恩恵を受けたことは確かである。

Ⅲ. 宗教について

1) イスラム教の慣習

バングラは、イスラム教徒が人口の80%以上を占める「イスラム教の国」である。その他、少数だがヒンズー教、仏教、キリスト教徒もいる。イスラム教の慣習で興味深かったのは、一夫多妻である事、禁酒である事、豚を食べない事、食事は右手で、大便の始末は左手でする事、一週間のうち休日が金曜日である事などである。けいけんな信者は、毎週5回、聖地メッカの方に向かいお祈りをする。たとえ仕事であっても、たとえ道路の脇であっても。ある中華料理店で注文をしようと辺りを見回すと、2メートルも離れていない壁際で、小さなじゅうたんを敷き、額を床に付けながらお祈りをしているボーイの姿を見付け、驚いたことがある。

2) 断食明祭と犠牲祭

イスラム教徒にとってはイードゥル・フィタルと呼ばれる断食月（イスラム教歴9月。ラマダンと呼ばれる）明けの祭りと、巡礼月（イスラム教歴12月）10日目のイードゥル・アザと呼ばれる犠牲祭が最も大きな宗教的行事である。この祭日を利用して、ダッカに働きに来ている人達は、家

族への御土産を手を帰省する。また、これらの祝祭日は、月の現れ方によって決められる。祝祭日が近付くと「お月見委員会」（仮称）とも呼ぶべき会が開かれ、そこに集まった政治的、宗教的に偉い方々が、夜、月の出具合を見て、決めるのだそうだ。大の大人が雁首揃えて、真剣な表情で月を見上げている姿を想像すると、凄いところへ来てしまったものだと思うにはいられなかった。

断食は、一ヵ月間、日の出から日の入りまで、何も口にしない。タバコも吸わなければ、つばさえ飲み込まないという厳しい修行と聞いた。しかし、その断食を真面目に実践している人は、私の周りには、余り居なかった。また、逆に日没後は、普段よりたくさん御飯を食べるという人もいる。また、犠牲祭には、信仰の証しとして、牛や山羊を犠牲として神に捧げるといふ祭りである。この日は、町じゅうのあちらこちらで牛が殺され、血なまぐさい匂いに包まれる。但し、牛を買って殺す事ができるのは、裕福な人達の話である。「富める者が貧しい者へ恵みを施すこと」というイスラム教の教えから、牛を殺した裕福な人は、一番美味しい部分の肉を取り、残った肉や内臓をこじきや貧しい人達に分け与えるのだそうだ。牛を殺した家の門の前には、どこからともなく、汚いビニール袋を持った人達が集まり、長い行列を作って施しを待っている。貧しい人達にとって、一年に1回、牛の肉を食べられる日になるわけである。

3) 祝祭日

1990年4月から1991年3月までのバングラの主な祝祭日は次の通りであった。

4月15日（日）	ベンガル暦新年
4月24日（火）	※シャベ・カダール（コーラン天啓の夜）
4月27日（金）～29日（日）	※イードゥル・フィタル（断食明祭）
5月8日（火）	※ブッダ・パーニマ（仏陀生誕・成仏・入滅祭）
7月4日（水）～6日（金）	※イードゥル・アザ（犠牲祭）
8月4日（土）	※モッハラム（イスラム暦新年）
9月29日（土）	ドゥルガ・プジャ（ドゥルガ女神祭）
10月5日（金）	※イード・ミラドゥン・ナビ（マホメット降誕祭）
12月16日（日）	戦勝記念日
2月21日（木）	シャヒード・デイ（言語運動の殉死者追悼日）
3月3日（日）	シャベ・バラッド
3月26日（火）	独立記念日

（※のついた祝祭日は、月の現れ方で決まる。）

IV. 現地での生活について

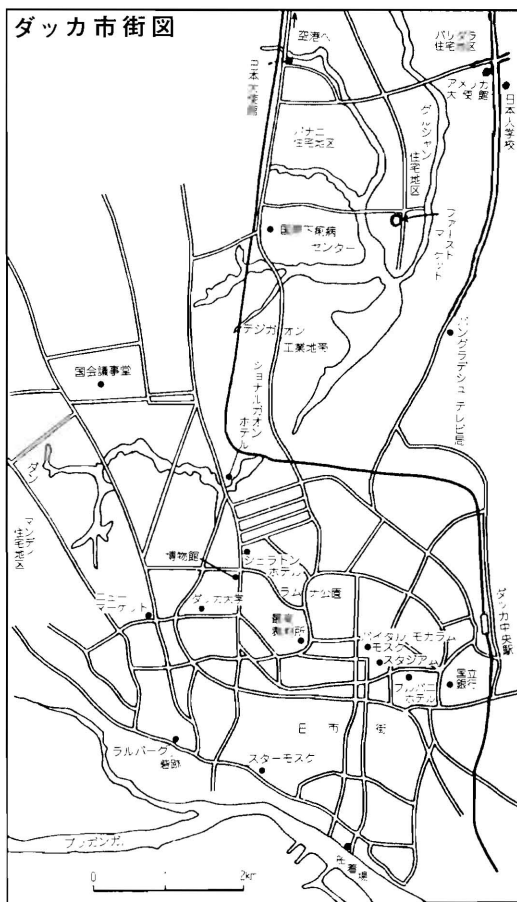
1) 食生活について

バングラでは、主食は米である。しかし、現地の米はインディカ米（長粒米）で、匂いがきつく、炊いても日本米のような粘りが無く、日本人の口に合わない味である。しかし、3年目は、比較的匂いが無い「パイザム」という種類の現地の米を食べた。炊きたてのときは結構美味しいが、冷めるとバサバサでどうにもならない。ダッカ日本人学校は給食がないので、3年間弁当を持っていったが、パイザムを食べるようになってからは箸ではなくスプーンを使わなければならなかった。肉は、一応手に入る。しかし、屠殺から小売りまでの過程が不衛生極まり無く、実際、現地調達していたのは、鳥肉だけである。野菜は、現地で調達した。12月から2月までの乾季にはトマト、ブロッコリー、カリフラワー、はくさい（小さい）、大根（細い）などが出回るが、雨季には、じゃがいも、玉葱（小さい）、ニンジン、オクラなどを除き、葉っぱの野菜はほとんど無くなる（写真1）。

私が住んでいたのは、市の北部、バナニ住宅地区にある貸家であるが、ファーストマーケットという市場へ、よく野菜を買いにいった（地図2参照）。そこで困ったのは、値段が、その場での交渉で決められること。相手は、日本人と見ると現地人に売る時の値段の3倍も4倍も高い値段をふっかけてくる。そこで、こっちも負けじと、必死に値切る。パイナップル1個買うのに、10分も15分もすったもんだすることもある。



写真1 ファーストマーケットの野菜売場



地図2 ダッカ市街地

今思えば、たかが5タカ、10タカ（1タカ＝約4円）で大騒ぎしなくても良かったなあと反省している。結局のところ、ダッカには、日本食品を売っている店はなく、肉・魚類を含めて、バンコクやシンガポールへ買い出し旅行に出なければならなかった。肉・魚は、冷凍し、ドライアイスを詰めてもらって、ダンボール箱に5つ・6つと買ってくる。空港でのチェックインの際には、いつも超過料金をまけてもらうよう交渉しなければならなかった。

2) 交通

市内の交通手段としては、バス、ベビータクシー（オート三輪）、リキシャ（人力車）などがある。バスには、屋根の上にも乗客が乗っており、運賃が安いのだそうだ（写真2）。ダッカから地方都市に向けて走っている長距離バスは、特に事故が多い。チッタゴンという港湾都市へ向かう国道を走ったときのことだが、6時間ぐらいの間に数台のバスが、道路脇に転落していた。

リキシャは、現地人の足として利用されている。但し、言葉の障害に加え、衛生上の問題もあり、かつ、危険が伴うので、外国人はほとんど利用しない。私は、時々利用した。これも、片言のベンガル語と身振り手振りで値段の交渉から始まる。値段が決まると、「ショジャ（まっすぐ）、バンディケ（右）、ダンディケ（左）」この3つの言葉を駆使して、目的地まで人力車を進めるのである。



写真2 「長距離バスとリキシャ」

V. 日本人との係わりについて

バングラは、数ある先進国の中で、日本から一番多くの援助を受けている（金額的に）。その例を、二つ紹介したい。一つは政府による援助、もう一つは民間レベルでの援助である。まず、メグナ橋である。この橋は、日本がODA事業の一つとして、無償で作ってあげたものだ。1990年5月、この橋の開通式に、海部首相が出席し渡り初めをされた。ODAの成功例として、高く評価されている。しかし、橋が日本からバングラへ渡される前は、全く無かった話



写真3 孤児院の中で

だが、道路を管理する役所が、急に通行料金を取り始めた。これでは、誰の為に、何の為に援助だか分からない。

二つ目は、日本のある宗教団体が作った施設である。親のない子、あるいは、全く養っていく能力がない親もとにいる子などを50人あずかっているそうだ（写真3）。その団体が資金を出し、土地を買い、施設を立て、施設を管理していく日本人を派遣している。全寮制で、衣食住をすべて面倒を見てあげている。将来は、自分でお金を稼ぐことができるような技術を身に付けるための研修施設も作るという話である。また、広い敷地内には水田や畑も作っている。

VI. おわりに

世界最貧国バングラデシュでは、多くの子供達が、学校へも行けず、ゴミひろいをしたり、レンガ割りをしたり、こじきをしたりしながら、毎日、たくましく生きている（写真4）。弱い子供は、病気やケガ、災害に負けて、死んでいく。強くなければ生きていけないのである。それでも、死ぬ子供より、生まれる子供の数の方が多いため、人口は増える一方である。そのため、人口稠密や多くの失業を生み、貧困はより一層深刻さを増していく。

小学校の教員である私は、担任している子供達に、世界中には、生きたくても生きられない子供がたくさんいるのだということ、日本に生まれ、日本で育っていけることの幸せを話してきた。

さらに、世界中には、日本人の手助けを必要としている国があるということも分かってもらいたいと努力している。中学生がいじめを苦に自殺するという事件が多発しているが、こんな子供達が、はたして、

世界の中の日本人として国際貢献し、たくましく生き抜いていけるのだろうか。これからの私の大きな課題である。



写真4 レンガを割る子供

参考文献

- 外務大臣官房国内広報課（1987）：「改訂新版海外生活の手引き第4巻 南西アジア編Ⅰ」
世界の動き社
- ダッカ日本人学校（1992）：社会科副読本「わたしたちのダッカ」